

須賀敦子(1929~1998)

『コルシア書店の仲間たち』

文春文庫 1995 年

1 コルシア書店とは何か

司祭で詩人のダヴィデ・マリア・トゥロルドが、戦後、親友のカミッロ・デ・ピアツといっしょに、数人の若者をまじえ、都心にあるサン・カルロ教会の場所を借りうけ、はじめた書店。須賀敦子は1960年、ミラノに転居～1971年の夏の終りまで居住。

「神を信じるものも、信じないものも、みないっしょに戦った」というフランスの抵抗運動の詩行が、戦後の風景のなかで遠い焚火のようにかがやいていたころ、せまいキリスト教の殻にとじこもらないで、人間のことばを話す「場」をつくらうというのが、コルシア・デイ・セルヴィ書店をはじめた人たちの理念だった。(p.34-35 の要旨まとめ)

ダヴィデとその書店に類するグループの方向は、ジャーナリストたちに、ふつう**カトリック左派**ということばで呼ばれる(彼ら自身は、冗談、または自嘲するとき以外は、このことばを使わなかった)。彼らの存在は、とくに工業の発達している北イタリアのいくつかの都市と、ローマ／ヴァチカンへの対抗意識のつよいフィレンツェなどにも、小規模の出版物や講演会を主軸にして、目につくようになった。一九五〇年代なかばのことである。

カトリック左派の思想は、遠くは十三世紀、階級的な中世の教会制度に刷新をもたらしたアッシジのフランチェスコなどに起源がもとめられるが、二十世紀におけるそれは、フランス革命以来、あらゆる社会制度の進展に背をむけて、かたくなに精神主義にとじこもらうとしたカトリック教会を、もういちど現代社会、あるいは現世にくみいれようとする運動として、第二次世界大戦後のフランスで最高潮に達した。

一九三〇年代に起こった、聖と俗の垣根をとりはらおうとする「あたらしい神学」が、多くの哲学者や神学者、そして、モリアックやベルナソスのような作家や、失意のキリストを描いて、宗教画に転機をもたらしたルオーなどを生んだが、一方、この神学を一種のイデオロギーとして社会的な運動にまで進展させたのが、エマニュエル・ムニエだった。彼が戦後、抵抗運動の経験をもとに説いた革命的共同体の思想は、一九五〇年代の初頭、パリ大学を中心に活躍したカトリック学生のあいだに、熱病のようにひろまっていた。教会の内部における、古来の修道院とは一線を画したあたらしい共同体の模索が、彼らを活動に駆りたてていた。(p.37-p38)

○ エマニュエル・ムニエ(1905-1950)、カトリック左派の霊性「対話」

若松 ロシア革命以来、カトリックは共産主義との闘いに大きな労力を費やしました。それは戦後も続いていて、共産主義者、あるいは無神論者は敵対する関係として固定されつつあった。しかしカトリックの内部でも異なる世界観を持っている人々からは、単に敵対する相手ではなく、もっとも創造的な対話の相手になり得

ると考える一群の人々が出てくる。彼らは、対決ではなく、対峙、さらには対話を通じて深められると考えた。(略)この地点に立つことができれば、異なる信仰、霊性をもった人々との対話も必然の展開になる。それを強調したのは(略)エマニュエル・ムーニエという思想家です。彼は「人格」の優位を提唱しました。人と人の交わりは、信仰、思想、国籍などを前提とするのではなく、人を人とたらしめているはたらき—それがムーニエの考える「人格」です—によって起こらねばならない、とムーニエは言いました。

(『没後20年 須賀敦子の本棚』文藝春秋 KAWADE 夢ムック 2018 所収「インタビュー 若松英輔 須賀敦子の信仰と言葉—生きて出会うべきものとしての「神」—」 p.45)

➡「対話」に重きをおき、信徒とか司祭というのは位ではなく役割にすぎず、仏教とかイスラム教といった他の宗教は、対話していく相手と考える。(→ムーニエの共同体論 p.41 銀の夜)キリスト教徒以外にもイエスの弟子はいる、と考えるので、教会から目をつけられることになる。コルシア書店とは「対話」の場だった。

夕方六時をすぎるところから、一日の仕事を終えた人たちが、つぎつぎに書店にやってきた。作家、詩人、新聞記者、弁護士、大学や高校の教師、聖職者。そのなかには、カトリックの司祭も、フランコの圧政をのがれてミラノに亡命していたカタローニャの修道僧も、ワルド派のプロテスタント牧師も、ユダヤ教のラビもいた。そして、若者の群れがあった。兵役の最中に、出張の名目で軍服のままさぼって、片すみで文学書に読みふけていたニーノ。両親にはまだ秘密だよ、といって恋人と待ちあわせていた高校生のバスクアーレ。そんな人たちが、家に帰るまでのみじかい時間、新刊書や社会情勢について、てんで勝手な議論をしていた。ダヴィデがいる日もあり、カミッロだけの日もある。ファンファーニが、ネンニがと、政治談義に花が咲く。共産党員がキリスト教民主党的コチコチをこっぴどくやっつける。だれかが仲裁にはいる。書店のせまい入口の通路が、人をかきわけるようにしないと奥に行けないほど、混みあう日もあった。(p.42)

しかしこの「対話」の場は、やがて”政治の季節”によって潰えることになる。「六七年に夫(ペッピーノ)が死んだあと、中国の文化大革命の余波をうけてヨーロッパの若者を揺りうごかした革新運動が、書店にも津波のように押し寄せて、あつというまにすべてを呑みこんだ。既成価値のひとつひとつが、むざんに叩きつぶされ、政治が友情に先行する、悪夢の日々が始まった。書店が交流の場より、闘争の場になることをえらび、思索より行動を、妥協より厳正をえらんで、ついに都心の店の立ち退きを決めた(p.30 入口のそばの椅子)」

➡ムーニエの思想を「革命的共同体の思想」と評している一方で、著者は革命を否定的に捉えているようにみえる。コルシア書店という「対話」の場には、革命がそのために失ってしまう友情、交流、思索、妥協が匿われていたのだった。しかし一方で、後に「あれから三十年、東京でこれを書いていると、書店の命運に一喜一憂した当時の空気が、まるで「ごっこ」のなかのとりたりにない出来事のように思える(p.42)」といったり、「私にはこれが、ルチアだけでなく、書店の仲間みんなが、晩い青春の日に没頭した嬉しい「ごっこ」の終りだったように思えてならない(p.225)」と、やや自嘲混じりにもいう。

この出来事に対して一線を引くような感受性が、本書を満たしているように感じられた。

自律しており融合していない複数の声や意識、すなわち十全な価値を持った声たちの真のポリフォニーは、じっさい、ドストエフスキーの長編小説の基本特性となっている。作品のなかでくりひろげられているのは、ただひとつの作者の意識に照らされたただひとつの客観的世界における複数の運命や生ではない。そうではなく、ここでは、自分たちの世界をもった複数の対等の意識こそが、みずからの非融合状態を保ちながら組み合わせあって、ある出来事という統合状態をなしているのである。

(ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』斎藤環『イルカと否定神学 対話ごときでなぜ回復が起こるのか』より孫引き)

2 革命を迂回して

近代以降のファシズムなどの圧政に対して、革命に理想を仮託した時代があり、そのようなヒロイックな世界への憧憬があったが、おそらく、本作品が描くのは、そのようなヒロイックな世界への幻滅のあとで、なお、シニカルではなく、地に足のついた理念を描きうるか、という問いなのではないだろうか。

KAWADE 夢ムック 文藝別冊『没後20年 須賀敦子の本棚』(河出書房新社 2018)に T・メルトン(トマス・マートン(1915年-1968年)は、アメリカ合衆国のカトリック教会厳律シトー会の修道司祭、作家)の『あたらしいことふるいこと』というテキストの翻訳が収録されており、以下の革命についての分析は須賀敦子が共感した考え方ではなかっただろうか。(章扉に「須賀敦子は1956年以降、コルシア書店の出版物などから興味ある論文を翻訳して祈祷の使徒会本部発行の月刊誌「聖心の使徒」に掲載、あわせて寄稿しました。」とある。)

革命とは、すべてのものを、完全にくつがえしてしまう、ひとつの変動ということになっています。しかし、政治革命の理念は、外観以外のものは、ひとつだってかえはしないでしょう。暴力がちからをふるい、権力は、ひとつの党派から、つぎの党派にうつっていくでしょう。しかし、煙が霽れ、死者がほうむられたとき、本質的にみて、すべての事態は、以前となんのかわりもみせないでしょう。すなわち、権力をにぎる少数の強者が、じぶん自身の目的のために、あらゆる人を利用することは、いつまでたってもかわりないのです。革命前とおなじ、いじきたなさ、むごたらしさ、煩惱、野心、強欲、そして偽善が、いぜんとして存在しつづけるでしょう。

(『没後20年 須賀敦子の本棚』文藝春秋 KAWADE 夢ムック 2018 所収 T・メルトン『あたらしいことふるいこと』p.198)

往々にして、革命とは結局のところ、権力者のすげかえに過ぎなかった。(p.36 銀の夜 ダヴィデの作品)

複数の声は、またぞろ大きなひとつの声にかき消されてしまう。ゆえに、革命に理念を託せないのならば、現状をやり過ごすしかないのか。それは大きな力(近代の国家や資本?)に屈服する他ないということなのか。その大きな力の前に、あまりにも非力だったゆえに、著者はコルシア書店の営為を「ごっこ」とも形容していたのだった。

とはいえ、一方で、理不尽な圧政や、悪政があるときに、人はその制度を変えようとし、社会変革を目指し、政治への参与という発想になるけれども、このときのディレンマは、そこで力に訴えた変革を望むと、結局、力においてのみ社会変革を望めないことの証左になってしまう。

➡むしろ、須賀敦子がコルシア書店に見い出していたのは、この非力な仲間たち、すなわち、“個”であり、本作で描かれているのは、この“個”を見つめる眼差しではなかっただろうか。

3 ごったまぜの交流の場

簡単に、各挿話をメモし、ごったまぜの交流の場(p.42)としての、『コルシア書店の仲間たち』を、“個”という視点で見たときに気になった点をあげる。

○入口のそばの椅子

コルシア書店のパトロン、ツィア・テレサ、テレサおばさま、またその娘たち、ニニとエレナ(姉妹)の話。テレサは、世の流れに組する、という合言葉のもと、僧服をぬぎ、セーターにズボンすがたになったトゥロイド神父をたしなめる。甥のジョヴァンニ・Pは、おそらくそのレジスタンスへの参加を通じて、家業を拒否している。

○銀の夜

ダヴィデ・マリア・トゥロイド神父と、コルシア書店のエピソード。ダヴィデはいわば「衝突」の人だった。運命共同体の理想を志し、やがてベルガモの山に、修道院を設立する。

○街

サン・ジュリアーノ・ミラネーゼという小さな町からのミラノ大聖堂を見、また、ミラノという街がもっている多面性(歴史や階級など)を描きだしていく。

○夜の会話

こちらもコルシア書店のパトロンで、ルキノ・ヴィスコンティの幼友達であるというフェデリーチ夫人の話で、さまざまなサロンの様子が描かれる。

○大通りの夢芝居

ジェッペット爺さんの作った木偶のピノッキオそっくりの文盲のミケーレのエピソード。絨毯の行商をしていたが、やがていなくなってしまう。

○家族

ニコレッタ・シポシュという、父親がユダヤ人で、ヒットラーに似ているというドイツ人と結婚することになったエピソード。

→でも、ニコレッタが帰ったあと、私はひさしぶりに、ほっとしていた。ミラノに住むようになって二年ちかく経ってはいんだけど、生きるエネルギーの大半が、コルシア・デイ・セルヴィ書店という、それ自体の歴史と思想をもち、たえず重い目標にむかって試行錯誤をかさねる共同体の周辺で燃焼されていたので、ニコレッタのお先まっくらで、真摯で、自己中心で、未完成そのものの語り口は、思いがけなく新鮮だった。思想のかけらもない、彼女のむしゃぶりつくような人生への期待と要求が、むしろこころよかった。そして、彼女の知的なそっけなさが、精神にまでとかく曲線を誇張するイタリアの女性のなかにあって好もしく、より自分に近いものに思えた。(p.122)

→ベルトが、うちのパパがユダヤ人だってこと、ドイツにいるかぎり、だれにもいっちゃいけないって、そう言うの。(p.126)

→医師だったから収容所で彼が生きのびたということは、なにを意味したのだろう。彼の暗い目をみながら、一瞬、考えてはいけないことが、私のあたまをよぎった。(p.126)

○小さい妹

ガッティの仕事が進まなくなった原因が明らかになる。ガッティに、子どもができたのだった。

→赤ん坊が生まれた時点で、ガッティはコルシア・デイ・セルヴィ書店の仕事はもうしないと仲間たちに宣言した。予期しない小さな妹の誕生が、出版の仕事を投げ出すための口実にすぎないことは、だれの目にもはっきりしていた。書店にしても、ペッピーノがいなくなったいま、この部門を進めていくだけのエネルギーはとてなかつたから、ガッティがこうした結論に達してくれたことは、好都合なのだった。(p.170)

○女ともだち

ガブリエーレ・カレッティの恋のエピソード。ドイツ人で、著名な作家の愛人であるというインゲ。マヌカンのグループ。ジェノワのアンナ。また、こんどは大丈夫かもしれないと評されるミーナ。

→戦前のベルリン生まれで、身のこなしの軽やかなインゲと、誠実が取柄で、彼女といっしょのときは永遠に照れているガブリエーレの組みあわせは、どうみても不釣り合だった。(略)お誕生日に大きなバラの花束がガブリエーレから届いたと、書店にきたインゲが話しているのを聞いて、大丈夫かな、という気がした。

(p.175)

→駅に送ってくれたふたりを、遠ざかっていく車窓に、頬をつけて目で追いながら、私は、もしかしたら、ガブリエーレ、こんどは大丈夫かもしれない、と思った。(p.185)

○オリーブ林のなかの家

パレスチナ・ユダヤ人のアシェル・ナウム。ミリアムとの結婚のためにイスラエルに帰るも、またミラノに帰ってきて、小説『グイード』を書く。やがてエチオピアの伯父さんの農場を手伝うことになる。

○不運

コルシア書店の「愛のミサ」というヴォランティアグループのブルジョワおばさん、カルラと、彼女が関わったドロボウ、ガストーネ、アンジェラ、ジャンニの話。

→私は、もしかしたら、ほんとうに、生まれつき不運な人間というものが、存在するのかもしれないと思った。

(p.208)

→この存在感がゼロみたいな人間の、どこから、この知識と論理と文体があふれでるのだろう。(p.210 アンジェラを評して)

○ふつうの重荷

書店を一からやり直している、ルチアの話。コルシア書店はダディーノ街書店となり、実際的なルチアは、書店の哲学のために、ミネッティというややファナティックな男を雇用する。書店はいまや重荷となった。

→彼女は自分の生活環境と書店を、以前よりはずっとはっきり区別して生きているようにみえた。書店は、もう彼女にとって英雄たちの戦場ではなくて、避けるわけにいかないだけの、だれもが人生で背負っている、ふつうの重荷になっていた。(p.226)

○ダヴィデにー

ダヴィデが亡くなったエピソード。

→コルシア・デイ・セルヴィ書店をめぐる、私たちは、ともするとそれを自分たちが求めている世界そのものであるかのように、あれこれと理想を思い描いた。そのことについては、書店をはじめたダヴィデも、彼をとりまいていた仲間たちも、ほぼおなじだったと思う。それぞれの心のなかにある書店が微妙に違っているのを、若い私たちは無視して、いちずに前進しようとした。その相違が、人間のだれもが、究極においては生きなければならない孤独と隣りあわせで、人それぞれ自分自身の孤独を確立しないかぎり、人生は始まらないということ、すくなくとも私は、ながいこと理解できないでいた。

若い日に思い描いたコルシア・デイ・セルヴィ書店を徐々に失うことによって、私たちはすこしずつ、孤独が、かつて私たちをおそれさせたような荒野でないことを知ったように思う。(p.232)

➡それぞれのエピソードは処世訓や、人生訓を教えるものでは決してなく、(したがって大雑把にいったって)決して一般化できないような“個”の有り様であり、その引き受けの物語であるだろう。この物語の「仲間たち」を描く文章には、それぞれと関わりをもちながらも、相互が交わらない部分、エッジ(事物の端)が際立つような印象を受ける。

すなわち、著者が描き出していたのは、“個”を取り繕ったり、糊塗することなく、個々が“個”のまま、行き交い、ときに衝突し、通り過ぎていくような場所であるといえるのではないか。(つつじ読書会では、『緑の家』に集う人々の衝突に似ている?)

4 ゆるいかたちの運動

津野海太郎『最後の読書』から。

1977年といえば須賀が日本にもどって六年後—その間、彼女は練馬区関町に設けた「エマウスの家」を拠点に、二十人ほどのボランティアの若者たちとともに廃品回収にはげんでいた。帰国まえに神戸曙光会のヴァラード神父とフランスで会い、そこでの話にはじまる運動だったらしい。

この「エマウスの家」の活動については、須賀もほとんど語っていないので、具体的なことはよくわからない。

でも、それがゴリゴリの使命感というよりは、「ためらい」や「ゆれ」や「うたがい」もすすんで受け入れる、ゆるいかたちの運動だったらしいといういどの推測はつく。そんななかで須賀は作業場に寝泊まりし、ときには廃品回収のためGパン姿で小型トラックを運転してまわったりもした。ただし、そこにはいつも「あれあれ、オバサンがそんなむりをして」という仲間うちでの笑いがつきまとっていたみたい。その点で、ともすれば美談にされがちだった往年の北原怜子(『蟻の町の子供たち』)とはちがう。

そして1975年の末に「エマウスの家」のリーダー役をしりぞき、大学教師と物書きの暮らしに移ってゆく。カトリック入信と聖心での奉仕活動にはじまる日本での八年間の短い文筆生活をへて、1998年に69歳で没した。もしいまの私の年齢まで生きることができたら、おそらく大きく完結したであろう「世界文学」の構想をあとにのこして。

(津野海太郎『最後の読書「17 柵をこえる」』新潮文庫 p.322)

ここで「ゆるいかたちの運動」として示されていることこそ、コルシア書店がその裡に匿っていた、友情、交流、思索、妥協を抱えた、あたらしい共同体の萌芽ではなかっただろうか。それはひとりの英雄が率いる革命によってもたらされるものではなく、「ためらい」や「ゆれ」や「うたがい」をすすんで受け入れる運動だったのだ。そこではまだ“個”が失われていない。(p.53 の銀の夜には、人々の先頭に立ってきたダヴィデの苦悩が表現された詩が紹介されている)

革命	ゆるいかたちの運動
闘争の場 (英雄-的) 政治、行動、厳正	交流の場 (個-的) 友情、思索、妥協

5 ごっこ

須賀敦子はナタリア・ギンズブルグという作家に、「自分のそれとある種の同質性をもった地下水が流れている」ことを見出すという。(『須賀敦子全集 第2巻「パヴェーゼだって…『ある家族の会話』ナタリア・ギンズブルグ』 p.496)

ナタリア・ギンズブルグはイタリア人の小説家で、須賀は『小説のなかの家族』というエッセイのなかで、ナタリア・ギンズブルグの小説『町と家と』を以下のように評している。(マンゾーニ(1785-1873)はイタリアの作家で、詩人)

「家族」とはなにか、その問題をナタリアはここ数年来追跡し続けてきた。いや、数年来に限らず、彼女の初期の傑作、『ある家族の会話』以来、家族という有機的共同体は、つねに彼女の関心を離れなかったと言ってよいだろう。一九七七年に書いた『家族』、そして一九七九年の『親愛なるミケーレ』でも彼女は、いろいろな家族から、家族をみつめて書いている。一九八三年の大著、『マンゾーニ家の人々』はある意味で、ナタリアの家族への関心の集大成かと考えられた。近代イタリア文学史に大きな足跡を残した作家マンゾーニの生涯を、彼自身およびその家族と友人たちが取り交わした書簡を縦横に用いて再構築するという大胆な手法を編み出したのも、ある時代を解明するにあたって、家族とその営みというものが(たとえそれが書簡というそれ自体半虚構的な材料であったとしても)、どれほど多くの貴重な情報を提供してくれるかを、ナタリアは作家の体験としても深く理解していたからだと考えてよいだろう。

『マンゾーニ家の人々』で、息苦しいほどの一体化を強いられた「家族」という体制を、十九世紀ミラノの知識層に生きた小貴族たちの群像を通して、その構成員ひとりひとりの深い孤独を垣間みせながら描きあげたギンズブルグは、この『町と家と』では、一九六〇年代を経て崩壊した、あるいは崩壊の過程にある、いわば「もと家族」の人たちが、人間であることにおいては十九世紀の家族のそれと全く異質とはいえない孤独を呼吸しながらも、伝統への盲従から解放された場において、新しいあるいは思いがけない形態の家族(それは「家族もどき」であったり、「家族ごっこ」であったりするのだが)を形成していく過程について語っている。

『マンゾーニ家の人々』では当然のことながら歴史的事実に縛られた叙述を、ここでは自由な虚構性を駆使して、ギンズブルグ固有の魅力的な性格を次々と描き、息をのむような状況を淡々とした語り口で次々に展開させる。

(『須賀敦子全集 第2巻「小説のなかの家族」』 p.499-500)

ここで須賀が「ごっこ」というのは、その「ごっこ」を通じて、新しい家族の形態を形成する試みを形容するものとしていわれている。つまり、「ごっこ」は、その試みに対して「しょせん、ごっこ遊びだから」といったふうに、高を括ってそういつているわけではないのだった。それはむしろ、新しい家族の形態を模索し、試行錯誤する、その試みのことをいっている。

須賀敦子には『想像するということ』というエッセイがある。

人とのつながりで、私たちはよく勘をはたらかせて行動する。しかし、勘というのは直観であるから、人によって、もともと鋭かったり、すこし鈍かったりするようだ。間違っただけで勘がよいになることも珍しくない。勘というのは、本来は、自分の身を護るために、人間に具わった自然の能力ではないだろうか。だからそのままでは、主観的に終始しやすいのではないか。

その生まれつきの勘を、系統だてて、というのか、もうしこし客観的に伸ばしていくのが想像力だと思う。

想像力という概念が、持てるものから持たないものへ、強者から弱者へと、一方通行的になって、縮んでしまったときに、思いやりということばが出てくるように、私には思える。弱いものも、自分よりも強いものの心の、あるいは行動の構造を、想像力を駆使して理解につとめるべきだという。自由な発想を、私たちはとかく忘れがちではないだろうか。

(『須賀敦子全集 第2巻「小説のなかの家族」』p.493-494)

たとえば、子どもたちは「ごっこ」遊びを通を通して、想像力や協調性、社会性などを学ぶのだといわれる。とすれば、コルシア書店の営為を、新しい社会の有り様を模索した、積極的な意味での「ごっこ」遊びと捉えてよいと思われる。

(省みてみれば、前回の『イスラエル・パレスチナ紛争をゼロから理解する』でみた「レモンの木」のエピソードも、紛争の大きさに対して、あまりにも小さい。とはいえ、その後継承された、ユダヤ人、アラブ人の共生を模索するその試みは、その規模からしても「ごっこ」遊びのようだが、しかし、たしかに共生が可能であることを示している。)

したがって、むしろ近代の行き詰まりにおいて、準備を要するのは、むしろこの「ごっこ」なのではないか。「ごっこ」とは未来を準備する営みだったのだ。

〈生き延びるための思想〉

「ゆるいかたちの運動」と「雄々しい革命」の差異は、今日的な課題にも通じているように思われる。

2026の紀伊國屋じんぶん大賞大賞受賞した、松本卓也著『斜め論』(筑摩書房)で著者は、上野千鶴子ら全共闘世代が、運動の渦中であってみた欺瞞や、運動の「その後」を論じ、上野の文章を紹介している。

思想という思想は、つくられたとたん、コトバのマジックに捉えられて自動運動を始める。その魅惑と陶酔からまぬがれるのがむずかしいことは、少しでもそれを味わったことのある者にはわかる。ましてや「死ぬための思想」は、威勢があり、かっこよく、しびれる。対するに「生き延びるための思想」は、ださく、みっともなく、うじうじとかっこわるい。しかもそれに対して、「卑怯者」、「臆病者」という非難が用意されていて、これに耐えられるひとは多くない。(p.102-103)

上野千鶴子は、「生き延びるための思想」をフェミニズムとともに語っている。「フェミニズムって、やっぱりダサくて日常的で(笑)、「今日のように明日も生きる」ための思想なんです。じゃないと子どもを産んでいられない」という。

「ゆるいかたちの運動」は「生き延びるための思想」に、「雄々しい革命」は「死ぬための思想」に通じている。